ニュージャンルセッション2014

羅生門

芥川龍之介

コンテンポラリーダンス 能 松山若子 上田智子 ハープ 東由希子 上野賢治 フルート 岩井美佳 映像

3/9 sun 15:00～

入場料 1500円（当日500円高）

＠金沢市民芸術村ミュージック工房pit4

お問い合わせ：金沢市民芸術村ミュージック工房
〒920-0046　石川県金沢市大和町 1-1
代表TEL(076)265-8300 FAX (076)265-8301
e-mail music@arrow.ocn.ne.jp

■主催 金沢市民芸術村アクションプラン実行委員会
■共催 金沢市,(公財)金沢芸術創造財団

ある日の暮方の事である。一人の下人げにんが、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹が剥げた、大きな朱の柱が立っている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹が剥げた、大きな朱の柱が立っている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかには誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災いがつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。言い伝えによると、昔の人は、この災いを、どうにかするために、手段を選んでいたのである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまで、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」という事を肯定しながらも、この「すれば」の上で、饑死をするか、道ばたの土塀の下か、羅生門の下か、どこかへ行き倒しになるかの三つの場合を想像した。すると、その荒れ果てたのよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという事になっていたのである。

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、あかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄ばみに来るのである。――もっとも今日は、その鴉の一羽も来ていない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鳥の糞がこびりついているのが見える。下人は、七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖あおの尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、この家の主人の命令で、暇を出されたのも、実はこの主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は、荒れ果てていた。今、この下人の主人の、長い間、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下さがりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして――云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、遠くから、さあさあ云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げる者の頭の上に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにかしようとしても、手段を選んでいられない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土塀の下で、饑死をするのである。そうして、この門の上へ持って来て、捨てて行くという事になっていたのである。

たってもない」という事であった。下人は、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」という事を、大義そうに立ち上がった。

下人は、大きな嚏をして、丹塗の柱に、やっとの思いで、重い腰を上げた。

丹塗の柱にも、とうに、朱の色は、あせてしまっていた。

下人は、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかく、夜を明かそうと、思ったのである。すると、幸い、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。

下人は、[illegible]段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」の上で、饑死をするか、道ばたの土塀の下か、羅生門の下か、どこかへ行き倒しになるかの三つの場合を想像した。すると、その荒れ果てたのよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという事になっていたのである。

下人は、[illegible]大義そうに立ち上がった。

下人は、[illegible]丹塗の柱にも、とうに、朱の色は、あせてしまっていた。

下人は、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかく、夜を明かそうと、思ったのである。すると、幸い、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。

下人は、[illegible]藁草履をはいた足を、その梯子の[illegible]走らないように気をつけながら、[illegible]楼へ上った。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をともして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、